農協生産部会における環境適応の原動力

―ＪＡふくおか八女　八女電照菊部会―

主事研究員　尾高恵美

今回紹介するJAふくおか八女の八女電照菊部会（以下「当部会」）は52年の歴史がある。50年以上の長きにわたって組織が存続するには、そのときどきの環境変化に迅速に適応することが欠かせない。適応に向けた取組みに踏み出すことに加えて、当部会のように部会員数173戸という大規模な共同販売組織の場合には、点の取組みを面として全体に広めることが重要になろう。以下では、当部会における環境変化に適応するためのさまざまな取組みのうち、新品種導入に注目してそれを可能とした背景を考察することにしたい。

1　当部会の戦略

福岡県のJAふくおか八女の07年度における農産物の販売・取扱高は257億円である。花きの販売・取扱高は52億円であるが、このうち、40億円を電照菊が占めている。

電照菊とは、本来は秋に開花する菊を電照によって開花時期を調整して栽培したものである。国内主産地は愛知県と福岡県であるが、近年輸入が増加しており、農林水産省『花き流通統計調査報告』によると、06年度における輪菊の輸入量は全国の卸売数量の2.2%を占めている。

当部会は、葬儀用等の業務需要に対応するために、高品質な菊を年間を通じて安定供給するとともに、新しい優良品種による差別化を基本戦略としている。また、安全・安心な菊づくりへの取組みとして06年度には部会員全員がエコファーマーの認証を取得した。

2　新品種の導入と普及のプロセス

(1)　品種の導入

当部会が、卸売市場において確固たる地位を確立するきっかけとなったのは、01年に「神馬（ジンバ）」という品種を導入したことである。神馬は、純白で花持ちがよいために葬儀用に適している。当部会は、全国に先駆けて導入するとともに、神馬のシェアが拡大するように栽培方法を公開して全国的な普及を促進した。卸売市場における神馬の評価が上昇するにつれて、その先進的な産地である当部会の知名度は高まった。

しかし、神馬には品種の権利がなかったため、安価な中国産神馬の輸入が急増する中、輸入菊との差別化が図られる新品種の導入が課題となってきた。そこで当部会は、県の農業試験場と共同で新品種の開発を図り、その中から雪のような透明感のある白色で、水の吸収（水揚げ）が神馬より優れている品種「雪姫」を育成し、07年度に導入を決定した。

新しい品種を導入して共同販売するには、品種開発は無論であるが、生産者のチャレンジ精神や、部会内での栽培技術の高位平準化が必要である。

(2)　若手生産者の部会運営への関与

当部会におけるチャレンジ精神を育む土壌として、部会青年部の活動、および若手生産者の意見が部会運営に反映される仕組みに注

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

目したい。

当部会では、JAの生産部会編入以前の八女市花き園芸組合時代の1971年に青年部を発足させた。青年部では、新しい技術を吸収するために研修や国内外の視察を行ったり、部会で導入すべき新しい品種や資材の試験を行っている。こうしたことを通じて、新しい事業に取組むことが習慣化されている。

また、若手生産者の意見は支部定例会を通じて全体の部会運営に反映されている。当部会の支部は地区ごとに設置されており、支部定例会は全農家が参加して毎月１回開催している。部会役員会での決定事項の伝達とともに、支部の意見を集約する場と位置づけられている。新品種導入に関しても支部定例会での協議を経て決定されている。

制度化されているわけではないが、支部定例会には、農家の親世代ではなく、次世代が参加しているケースが多い。次代の当部会を担う若手の意見を部会運営に取り込むためである。部会役員は親世代が務めているが、支部定例会を通じて部会全体の運営に若手の意見や要望を取り入れる仕組みになっている。

⑶　栽培技術の高位平準化の仕組み

当部会では、栽培マニュアルの作成、定期的な栽培方法の検討、品評会への参加によって、栽培技術の高位平準化に努めている。

新品種への移行を促進するために、部会内に栽培技術指導に関しての専門部である指導部を設置し、青年部と協力して、栽培マニュアルを作成している。

また、栽培に関する課題に機敏に対応するために、支部の代表が参加して毎月２回会議を開催している。そこでは、各地区の生育状況を報告するとともに、品種特性やそのときの天候に応じて栽培方法を検討している。

施設での収穫作業の様子

加えて、各種品評会は個々の部会員が技術を向上させる誘因となっている。部会青年部において年２回品評会が開催されるほか、福岡県の品評会（年３回）や九州地域の品評会（年１回）があり、個人として出品している。とくに12月に開催される「技術・ほ場の部」では上位入賞を目指して、部会員同士が技術を競うが、競うだけではなく、青年部では品評会の後に上位入賞者の施設を見学し、互いに学び合う機会としている。

これらの栽培技術に関する高位平準化の仕組みによって、個々の部会員が生み出した技術を全体に普及し、新しい品種への移行を円滑にしている。これにより、有利に共同販売することが可能となっている。

一般的に組織が大規模になるほど、出荷ロットが大きいために卸売市場での評価は高いが、部会員数が多いために変化への対応に時間がかかるという面もあろう。当部会では、若手生産者の部会運営への関与と栽培技術の高位平準化の仕組みにより新品種への円滑な移行を実現している。

（おだか　めぐみ）

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。